

見仏について

見仏に関する問題は、特に釈尊滅後の仏教において重要であり、かつ念仏や観仏ともからみあい、さらには仏教全般を通じての基本的な問題である。従つて、見仏についての検討は仏教の根本問題の一端に触れることになるう。しかし、これは仏教全般にかかわるものであるため、今は『瑜伽論』を手掛りとして法身の問題を中心に、仏教者が仏を如何に認識し、かつそれを体現していつたかという観点から見ていきたい。この『瑜伽論』は卷十九に見仏に関する五偈を説くが、その第一偈は『金剛般若経』をはじめ、多くの経論に引用せられ法身を見る場合に重視すべきものである。（この偈は *Abhidatta-Nikāya*, vol. II, p. 71 に対応される。）また『瑜伽論』はこの釈中に、*Suttanti-Pāṭi* 以下の引用偈を掲げて論ずるが、それは『大毘婆沙論』にも引用されているものと同偈である。従つて、これらの点から、今は原始仏教、阿毘達磨、大乘という大きな流れの中での見仏思想の一面面を見ることにしたい。そこで、『瑜伽論』の偈をあげれば

小 峰 弥 彦

若以色量我 以音声寻我 欲食所执持 彼不能知我
 若於内了知 於外不能見 由内果觀察 彼音声所引 若於
 内無知 於外而能見 由外果觀察 亦音声所引 若於内無
 知 於外不能見 彼普障愚夫 亦音声所引 若於内了知
 於外亦能見 英雄出離慧 非音声所引（大正・三十・三八二・
 b c）

この第一偈は法身としての仏を見るものであつて、色身を否定し、法身を主張するという意味で重要であり、従つて『瑜伽論』はこの偈を釈して、明確に法身を見ることこそ仏を見ることであると論じて来る。即ち、

諸賢聖除斷調伏。超越欲貪得聖慧眼。彼由如是聖慧眼故。
 於内証解如來法身。雖於外見如來色身。或見制多或圖画等。
 而能了知。非第一義正等覺。彼由如是於内正知於外正觀。
 不隨他論及他音声。不信順他非他所引。於仏法僧決定信
 受。如是皆由了知如來法身故。致如此。

復次今当略弁上所說義。謂薄伽梵。此中略示若唯世俗見如
 來者則不決定。若以勝義見如來者是則決定。（三十・三八

二・c)

以上の如く、内に如來の法身を証解し、外に正しく觀察することを主張することは、煩惱によつて分別する如來の色身、即ち如來の色身を纏綿する煩惱によつて見ることは、見仏そのものにとらわれることを意味し、そのような見を否定し法身を見ることである。また、ここに論じられている内外の問題は、内は仏教内部を外は外道をもからませている〔近不善人聞不正法。隨逐他論及他音声。信順於他。他所引攝。他所引故於佛法僧還生毀謗。〕同三八二・c)と考えられるが、しかし、内外いづれにしても、それは自己自身において仏を見ることに基本がおかれ、内の問題に還元される。そして内の問題として法身を主張することは、当然そこに具体的な実践としての長い修道の階程によつて如來を見、これを自己のうちに體現することに深い意味がある。つまり、如來に如來の法身を知ることができないのは、虚妄分別の欲貪を斷ずることができないことに起因し、その結果他論の音声に引かれることとなる。そこで『瑜伽論』は、これらを斷ずるために經証として Suttanti-Pāṭi (No. 1036, 1037) の偈を引用する。

念慧与_レ名色_一 今問是一切 何当_レ永滅尽_一 唯願為_レ我說 念慧与_レ名色_一 我說是一切 若諸識永滅 於_レ斯永滅尽 (三十・三八六・b)

即ち、虚妄分別によつて生じた色想を除くために、その根

見仏について (小 峰)

本である識の滅を説き、さらに、除色想の具体的な修道として四念処觀をあげ注釈するのである。たとえば

於_レ四念住 若念若慧已善修故。已善証_レ得清淨識_一故唯有_レ決定。於_レ無余依涅槃界中善清淨識_一当_レ永滅_一故。若念若慧亦隨永滅。余依所攝先業所引一切名色亦隨滅尽。(三十・三八七・a)

ここに除色想も結局、識住の問題として識の滅を説くことになるが、『大毘婆沙論』第一三六卷に内に「色想無くして外色を觀ず」(二七・七〇四・b)として具体的に除色想に關し、三種の觀法をあげる。『大智度論』においても八背捨を説く中に同じ喩をあげ除色想を論じている。(七) ついで、Suttanti-pāṭiより衆義品、波羅衍品の引用偈をあげ、先の觀法を身念住とし、この引用偈を法念住と論じている。

問除色想言有_二多処說_一。謂此処說_二雜蘊_一。亦言_二入無色定除去色想_一。波羅衍拏亦作_二是說_一。諸有除色想 能除_二一切身於内外法中_一無有_二不見者_一 衆義品中亦_二是說_一 於_レ想有想_二非即離_一 亦非_二無想非除想_一 如_レ是平等除_二色想_一 無有_二染著彼因緣_一——中略——此除色想是身念住。波羅衍拏衆義品說。除色想是法念住。(二七・七〇六・a—b)

かくして、ここに身念住における死の確認から法念住へと進む過程をみることができるが、さらに法念住に關しては、『大智度論』にも詳細に論じられている。たとえば法念処を説く中「菩薩云何觀_二法念処_一。觀_二一切法_一不在_レ内不在_レ外。

不_レ過去未來。現世中但從_二因縁和合妄見_一生無_レ有_二実定_一。（二
十五・二〇四・a）と論じ、さらには『楞伽經』を引用し、法
でさえも捨てざるべきものとして、空の立場から主張されて
くる。このように、具体的には四念処、八背捨等の修道によ
つて除色想がなされるが、前述の如く究極的には識の滅除、
即ち識住の問題である。そこで『瑜伽論』はつづいて、

云何念_二所行_一 諸識當_二永滅_一 今請垂_二方便_一 為_二釈令_レ無_レ疑
内外諸受_二 都不_レ生_二欣樂_一 如是念_二所行_一 諸識當_二永滅_一（三
十・三八六・b—c）

の偈を説き、有余の所撰たる一切の色想は識の滅によつて
断ぜられるとする。（この偈は Suttam-pāṇi No. 1111 に相応する。）
そこで『大毘婆沙論』ではさらに識の滅に関し次の如く論じ
ている。

此中愛所_レ潤識授受不_レ離故名_二識住_一。有説。此中諸有漏識隨_二順取
識_一生_二起執着_一。安住增長故名_二識住_一。（二十七・七〇六・c）

さらに、王と王路の喩をもつて識と識住の關係をのべ、結
論的には有漏法は識住であり、無漏法は識住ではないとす
る。即ち、色想は我々の意識の奥に根ざす煩惱のからみを意
味し、従つて色想の除去も単なる無意識を言うのではなく、
煩惱のまつわる識に流されない、何物にもとらわれない主体
的なあり方を指すものと考えられよう。識住の問題は『大毘
婆沙論』でさらに四識住、七識住と論ぜられ、また大乘にお

いても阿頼耶識の問題へと展開するが、今は触れないことと
する。以上の如く、如何に仏を見、かつ実践していくかにつ
いて見て来たが、そこには法身を見るところという一貫した流れと
しての見仏思想を理解できる。このような立場は般若經にも
共通するものであらう。たとえば『大品般若經』法尚品に、

善男子。若有_レ人分_二別諸仏有_レ来有_レ去_一。当_レ知是人皆愚夫。何以
故。善男子。諸仏不_レ可_レ以_二色身_一見。諸仏法身無_レ来無_レ去。——中
略——若有_二衆生不_レ知_二諸法如夢_一是仏。是人分_二別諸仏有_レ来有_レ
去。不_レ知_二諸法実相_一。故。（八・四二一・c—四二二・a）

『小品般若經』も同様な立場である。諸仏如来不_レ應_レ以_二色
身_一見。諸仏如来皆是法身故。善男子。諸法実相無_レ来無_レ去。
諸仏如来示復如是。（八・五八四・b）このように見仏とし
て、その真なる意味は法身仏を見ることとする。これはすで
に Suttam-pāṇi から根本問題として、ある意味では見極め
られていたかのように考えられるが、その法身が空性による
法性身と明確にされるのは般若經の立場からであらう。それ
はともかく、このように、法身仏を歴史の中に認識すること
は、仏教全般の流れのなかにその核心となれるものを認識す
ることにもなる。特に大乘の出発点としての般若經のう
ちに法性法身を見ることは、爾後の大乘仏教の発展に對して、
その指標を明示したものといえることができる。

（註略）